

## 今日の説教のポイント<詩編 23 編 1～6 節>

### ①告白と招きとしての「主は羊飼ひ」

人として生きる上で、「わたしとは誰か」という問題を避けることはできません。成長の過程で問い、悩みを抱えて問い、死を前に必ず問われることとなります。死に直面する時、わたしたちはそれに何と答えて行くのでしょうか。

詩人は「**主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない**」と言います(1 節)。呼応するように、キリストも言われます。「わたしは良い羊飼ひである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。・・・わたしは羊のために命を捨てる」(ヨハネ福音書 10 章 14～15 節)。これらは、強烈な告白であるとともに招きでもあります。

### ②魂を生き返らせてくださる方のもとへ

詩人は続けてこう言います。「**主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる**」と。ここでいう「生き返る」は、「立ち返る」という意味です。わたしたちの人生には、自分の魂を見失わせるような悩みや悲しみがあります。どうにもならない現実もあります。しかし、詩人は、わたしたちがどのような状況にあっても、神に立ち返るならば、神の恵みのもとに自分を見出すことになる、と告げるのです。イエスもまた、こう呼びかけています。「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう**」(マタイ 11 章 28 節)。

### ③死の陰の谷を行くときも

羊飼ひは、命に至る**正しい道**へと羊を導きます。それは、「**死の陰の谷**」を必ず通る道でもあります。死は、確かにわたしたちの全てを破壊し、呑み込む、虚無の力です。しかし、問題は死そのものだけでしょうか。まことの羊飼�から離れてしまうことではないでしょうか。詩人は、死の谷を行く時も「**あなたがわたしと共にいてくださる**」と告白します。それは、恐怖の中で自分に言い聞かせる呪文でしょうか。いえ、確かな信仰の現実です。なぜなら、イエス・キリストの十字架という「**わたしを力づける**」究極の鞭と杖があるからです。